

人権同和教育啓発資料

人権つうしん

第26号

発行 長野県教育委員会人権・同和教育課
 発行人 小幡 誠 宣
 長野市大字南長野字幅下692-2
 電話 026-235-7452
 FAX 026-235-7490

はらっぱの思い
 わたしたちも地域に生きよう

草っぱらの、さえずるもの何もないところで、時間も気にせず、うたた寝。温かい太陽のもと、みんなで転げまわっても、歌っても、いいところ。顔を吹き抜ける風。体全体にそよぐ風。遠くの鳥のさえずり。何も無いと思っていたまわりには、いっぱい心地よさを感じている・・・

はらっぱ。
 「はらっぱのレストラン」
 レシーフより」

地域作業所「はらっぱのレストラン」は私の住むI市にあります。精神保健福祉を考える「はらっぱの会」がその運営にあたっています。「精神の病気になるっても、自分らしく、のびのびと地域の中で生きたい。」そんな願いのもとに生まれました。

現在、「はらっぱのレストラン」には、十数名の方が通っています。精神

障害者グループホーム『つれづれ草』から通ってくる方、一人暮らしのアパートから通ってくる方、家族と一緒に暮らす自宅から通ってくる方など、I市やその近隣の市町村に住む皆さんです。

私が訪ねたときは、ちょうどお昼休みの時間でした。それぞれが自由気ままに安らぎの時間を過ごしています。私が案内された大きなテーブルのまわりに、三々五々皆さんが集まってきました。初対面の私への歓迎の気持ちを含めた明るい挨拶の声、そして優しいまなざしに、肩の力が抜けていくのがわかりました。

しばらくお茶をいただきましたながら「はらっぱ」の意味やレストランの計画についてお聞きしました。

NさんとHさんは、こんな話をしてくれました。「この病気はなりたくてなつたんじゃないんです。会

社でいじめにあつて、いらして、とうとう家で暴力をふるってしまつて、それで病院へ入つたんです。何がなんだかわからなくなつたとき、話をきいてもらえる人がそばにいるのがうれしいんです。」

「私は偶然この病気になつただけなんです。誰でもなり得ることなんです。ここは無理をしないでいいから安心できるんです。Sさんのおかげで、私は自分ごとりもどし、自分が普通に生きていくような気がしました。」

また、『つれづれ草』の世話人であるSさんは、こう語ってくれました。「精神の病気がある方にとって、公園や施設のように、企画され、決められ、つくられたものでは駄目なんです。やつてやるのでなく、人と人とのつながりからできる風通しが大事なんです。精神の病気のある方々と、無理してつながる関係ではだめなんです。ルールはつくりません。人と人の間から何が生まれてくるか。私たちは人とつきあう文化をつくっていくんです。ここにしていると自分が鍛えられますね。本当の人と

人のつきあいがあるんですから・・・。」

はらっぱの思いは次の三つだそうです。

- 一 精神の病気の大変さがあつても、リラククスできる空間
- 二 小さなことでも、短い時間でも、人と一緒に楽しめる活動
- 三 病気の仲間とも、地域

の人たちとも、自分のペースで交流したい。街の中の「はらっぱ」で出会った皆さんとともに和やかに語り合った時間と心通わせた空間。そこには、陽のあたる原っぱにそよぐ春風のようなすがすがしさと、体を優しく包み込む春風のおいがありました。

わたしのあまひ

I 養護学校 高等部 三年
 O Jさん (女子)



A コープサマーセールがありました。お客さんが「いい製品だね。」と言ってくれました。私は「どうぞ、ごゆっくり見てみてください。」と言いました。

いっしょけんめいつくつたので、よかつたなあと思ひました。

お客さんが、「かわいい弁当袋だね。」と言ってくれました。私はうれしくて、大きな声で、「ありがとうございます。」と言いました。


引つ込み思案で自分を表現することが苦手なO Jさん。彼女は制作販売活動のためにいっしょけんめい作った製品を、お客さんからお世辞ぬきで、ほめてもらったことがうれしくて、思わず大きな声で「ありがとうございます。」と言いました。

「この前出した宿題、たぶんやっつけないと思います。」と、やさしく問う指導者のKさん。それを聞いて、ほっとしたのか、お互い顔を見合わせてどっと笑みがかはれ出す。ここはN市S識字学級です。

「社会体制や社会意識が助長してきた同和問題。文字を奪われて学校に行けなかったのは、同和地区住民

**自分の子どもに、
同和問題について
語る事ができますか。**

N市 S識字学級



に責任があるのではなくて教育の責任です。」と語るKさん。

「識字学級がはじまった当時、私の母親たちは、何をやったらよいかわからなかつたようです。支部の女性が集まって、漢字を習おう、習字をやるうということから始まって、最初は詩吟だったそうです。」と、始まった当時のことを母の言葉で語るS子さん。

こうして始まった識字学級の、二〇年の歳月の中で、大切な宝物がここにはあります。それが文集『草つき穴』です。

「自分の子どもに同和問題について語る事ができますか。」というKさんの問いかけで、自分の体験を語り継ぐことから始まりました。

「当時、文字を書けな

った私たちは子どもたちの学校の先生に家に来てもらって、聞き取りをしてもらって、文集『草つき穴』ができました。と、懐かしく語るSさん。

「差別をなくしたいと願ってはいますが、自分の言葉でうまく語れずに、自分が情けなくて涙が出てくる。そんな自分だから子どもに部落のことを話すことはできなかった。」

『草つき穴』を出した当時を思い出して語るTさん。

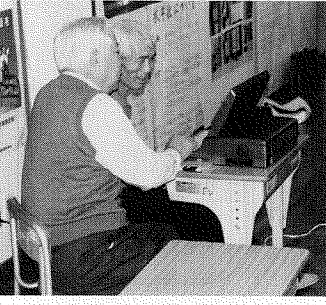
ある日、解放子ども会で、結婚差別に関する学習をした子どもが「おかあさん、なぜA子さんは自分の生まれた家に帰れないの?」と疑問をぶつけてきました。それにどう応えたいのか、自分にはその力がなかつたと残念そうに振り返るSさん。

みんなの目的がはっきりしてきたのは、それからです。

「自分の子どもに同和問題について語る事ができるようになる。」

学習がますます楽しくなってきたそうです。

今、S識字学級では一人一台ずつワープロを取り出しては、文字をゆっくりと楽しみながら打ち込んでいます。自分の思いを、今度こそ自分の力で打ち込めるようにと願いながら…。



はじめの1歩

N社の人権同和教育

M町にあるN社には、パートの方を含めて三五〇名ほどの従業員が働いています。このN社で、昨年までに五回の「人権啓発」研修会が行われました。

【はじめり】

会となりました。参加者はともに笑顔で語り合い、講師の身近な話に耳を傾け、様々な人権問題にふれながら、自分自身の問題として考え合うことができました。

【社内アンケートの実施】

五回の研修会の後、全従業員を対象としたアンケート調査を行いました。「研修会の内容」と「社内の問題と今後の要望」について、高い回収率によりたくさんの方の声を得ることができました。このことは「この会社なら聞いてくれる」という安心感と、人権問題を自分のこととして感じることの大切さ

この研修会を行う前年、N社では結核を発症した患者に對する根も葉もない噂が飛び交ったり、盗難事件に關わつて、偏見から在日外国人従業員への差別的な発言がなされたりと、社内に陰湿な流言飛語があらました。そこで、当事者の思いに立つて、偏見・差別を温存する意識の変革こそが必要と考え、この研修会の実施に踏み切つたのです。

【どんな研修会をするか】

全従業員が必ず参加できるように、五回の研修会を計画しました。しかも操業を停止することなく就業時間内に行いました。

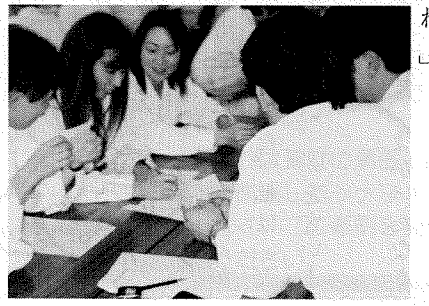
この研修会では、ワークショップを中心とした学習

【研修会を企画したTさんは】

「あのアンケートはこれからも活かしていきます。先日の課長会議で、全員の記述の言葉を読み合わせました。一人一人の生の声から、会社への期待や意欲を感じました。特にパートの方の本音を聞いたことが良かったです。みんな会社を思ってくれているなあ、自分を大切にしているなあと思いました。働きやすい職場づくりへの責任と自信が

わいてきました。初めは不安もありましたが、やってみてよかったです。ワークショップを入れた話は自分の心にしみませね。あの柔らかな雰囲気アンケートにつながったと思います。とにかくあの研修会で、まず一歩を踏み出すことができました。やったら終わりではないんです。まさに「はじめの1歩」ですね。」

N社のように、互いの人権を尊重し、理解と信頼のできる人間関係を作り上げていくことが、会社経営にとっても不可欠であり、プラスになるのではないでしょう。それが企業のイメージを高めるとともに、生産性や業績のアップなどにもつながるはずだということを、N社のとらえから感じました。

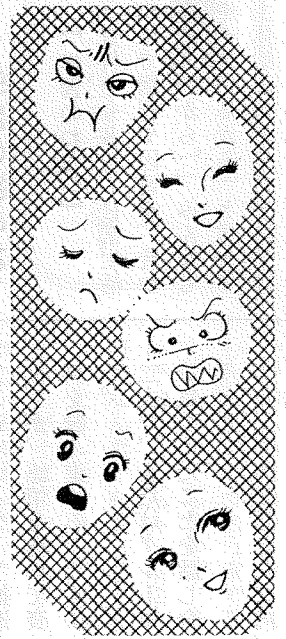


お母さん

今日のあなたの顔は？

お母さんの笑顔は子どもへのプレゼント。
お母さん、朝、鏡に向かったら、ちよつと気をつけて探してみよう、眉の間（眉間）に、縦ジワがないかと。そして、子どもから「おかあさん」と呼ばれたとき、どんな表情で返事を返しているのか、そつとやってみ

ましよう。
鏡の中の自分を見て、自分でもうれしくなるような、そんな表情を見つけてみよう。どんなに忙しいときでも、どんなに腹が立っているときも、子どもへの語りかけには、その「すてきな」笑顔で耳傾けよう。



母は無学の人でした
日記をつける人でした
夜 寝る前の大仕事
母ちゃん、何 書いてるの
そつとのぞく その先に
読めない文字がありました

はじめは隠す母でした
われには 読めぬエ
笑って見せる母の字は
時間をかけると読めました
孫たちの尊敬する母でした
笑顔のすてきな母でした (HM)

気になる姉弟がいま
した。いつも人形のよ
うに無表情なのです。
寂しいようなその表情
の中に、お母さんの表
情が浮かんできまし
た。お母さんの表情が
子どもたちにそのまま
受け継がれたのでしょ
うか。広いこの世界で
「お母さん」と呼んで
くれる人はいったい何
人いるのでしょうか。
お母さん、子どもた
ちにすばらしい笑顔
をプレゼントしまし
ょう。

つらくて泣いたとき、
お母さんから「どんな
ことがあっても、あな
たが一番だからね」
小5女子
「2332人の子ども
たち・こんな一言がう
れしかった」より

ビデオ紹介

「ドキュメンタリー 琴美の決意」
差別なき未来に向かつて

長野県同和教育推進
協議会のビデオ制作
委員会では、標記の
ような啓発ビデオを
作りました。

琴美さんには一歳六
ヶ月になる男の子がい
ます。夫の太郎さんと
ともに、働きながら子
育てに懸命の毎日
です。

琴美さんの両親は周
囲の反対を押し切って
二三年前に結婚しまし
た。父親の信さんが被
差別部落の出身青年だ
ったからです。今も母
親の真樹子さんの生家
とは断絶したまま
です。

このビデオの取材に
応じることを長い間迷
い悩んだ琴美さんでし
たが、夫の太郎さんの
後押しにより、思い切
って自分の思いを語り

始めました。
かわいい我が子のた
めにも、差別のない明
るい未来に向かっ
て...

このビデオは、部落
差別が見えにくくなっ
ていると言われていま
現在、若い世代はどう
感じているのか、二二
歳の琴美さんの目を通
して、差別とは何かを
訴えています。

私たち一人一人が同
和問題に対してどう向
き合っているか、どう
かを問う作品です。

企画は長野県同和教
育推進協議会。制作は
信越放送。上映時間
は三十分です。

お問い合わせは長野
県同和教育推進協議会
(電話026-234
-6907)
(FAX026-23
4-3177)

